

# 語の意味変化に伴う共起語の選択制限 —フランス語の移動動詞 *arriver* を例に—

吉武大輝

## はじめに

本稿では、フランス語の移動動詞の一つである *arriver* において、その動詞の意味が変化するにつれて、起点を表す前置詞 **de** (中性代名詞 **en**) の共起が徐々に制約されるということを確認する。尾形 (2000) は、現代フランス語において、起点を表す前置詞 **de** は生起・散発を表す場合の *arriver* と共起することができないと主張する。<sup>1)</sup> 本研究では、その制約が各構文の出現時期においてそれらに突如として課されたものではなく、新用法確立に付随して漸次的に課されたということを主張する。

そのため、本稿では、動詞 *arriver* における新用法出現のメカニズムを文法化の観点より論じた後、動詞 *arriver* における各用法・構文の出現時期 (意味変化の時期) を具体的に特定した上で、各時期の各構文 (主に、散発用法・可能用法) における前置詞 **de** (中性代名詞 **en**) の共起率を測定し、新用法確立に伴う前置詞 **de** (中性代名詞 **en**) の共起率の低下を確認する。

## 1. 現代フランス語と古フランス語における動詞 *arriver* の用法

最初に、現代フランス語における動詞 *arriver* の用法を確認しておく。辞書を基準として、現代フランス語における動詞 *arriver* の用法を大まかに分類すると以下のようになる。<sup>2)</sup>

1. 移動用法 ([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>)]) : Le train *arrive* à Paris dans une heure.  
(列車は一時間後にパリに着く。)
2. 可能用法 ([N<sub>1</sub> V à inf.]) : Je n'*arrive* pas à trouver mon stylo.  
(どうしても万年筆が見つからない。)
3. 生起用法 ([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>)]) : Vous savez ce qui lui *est arrivé* hier ?  
(きのう彼 (女) に何が起こったのか知っていますか。)
4. 散発用法  
([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>)]・[II V à N<sub>1</sub> de inf.]・[II V que N<sub>1</sub> V]) : Il *arrive* souvent des accidents à ce carrefour.  
(この交差点ではしょっちゅう事故が起きる。)  
Il *peut arriver* à tout le monde de se tromper.  
(誰でも間違えることはある。)  
Il *arrive* que nous allions ensemble au cinéma.  
(私達は一緒に映画に行くこともある。)

次に、古フランス語における動詞 *arriver* の用法を確認する。古フランス語における当該の動詞には移動用法のみが存在し、根源的な意味は「～を岸に連れて行く」であった (cf. *Dictionnaire de l'Ancien Français*)。一方で、生起を表す際には、*venir* の派生語 (*advenir*, *survenir* 等) が使われた。<sup>3)</sup>

## 2. 多義性の把握方法と前置詞 *de* の適合性・不適合性

### 2.1. 意味変化と構文変化の方向性

本論では、古フランス語期から存在する移動用法の *arriver* において、可能用法・生起用法・散発用法が付加されたメカニズムを文法化の観点より分析する。文法化とは、内容語から機能語への漸次的変化 (意味の漂白化) のことである。<sup>4)</sup> 動詞 *arriver* において、文法化を確認することができる点は、可能用法と散発用法の二つである。例えば、可能用法では、「*Je n'arrive pas à trouver mon stylo.*」を法動詞 *pouvoir* を用いて「*Je ne peux pas trouver mon stylo.*」と換言することができる。<sup>5)</sup> また、Kleiber (1983) によれば、散発用法においても同様に、「*Il arrive que les Alsaciens soient obèses.*」が「*Les Alsaciens peuvent être obèses.*」というように法動詞 *pouvoir* を用いて換言することができる。<sup>6)</sup> この二点より、動詞 *arriver* には機能語としての役割が存在すると言える。

最初に、主語と位格補語に名詞句を取る構文について説明する。1章にて見たように、移動用法 ( $[N_1 V (à N_2)]$ )・生起用法 ( $[N_1 V (à N_2)]$ )・主語に名詞句をとる散発用法 ( $[N_1 V (à N_2)]$ ) は、主語と着点として名詞句を取る。移動用法から生起用法・散発用法への派生現象は共起する名詞の特徴によって説明することが可能である。山梨 (2009: 112-113) は、動詞が比喩的に使われると同時に主語名詞が有生物的性質から無生物的性質へ一般的に変化すると説明しており、主語名詞が抽象化すると主張する。また、尾形 (2000: 102) は、主語と着点として用いられる名詞を具体と抽象という基準で以って分類することで、動詞 *arriver* の構文を整理する。尾形 (2000: 102) によれば、生起・散発を表す動詞 *arriver* では、抽象名詞のみが主語として用いられる。これらのことから、移動用法の次に生起用法・散発用法が出現したということが考えられる。

次に、主語と位格補語に名詞句を取らない構文について説明する。この構文は、1章にて見た可能 ( $[N_1 V à inf.]$ )・散発 ( $[II V à N_1 de inf.]$ ・ $[II V que N_1 V]$ ) を表す構文である。可能用法の構文は着点として不定詞 (*à inf.*) を取り、散発用法の三つのうちの二つの構文は主語として不定詞 (*de inf.*) と補文節 (*que S V*) を取る。Iyeiri (2010) は、英語における不定詞構文と補文節構文の史的発達について説明をしており、初期近代英語期に *that* 節が *to* 不定詞に置換される補文推移が存在したと主張する。故に、これらの三つの構文のうち、 $[II V que N_1 V]$  という形式をとる散発用法が最初に出現し、次に可能用法 ( $[N_1 V à inf.]$ )、及び、 $[II V à N_1 de inf.]$  という形式をとる散発用法が出現したということが予想される。

## 2.2. 前置詞 de の適合性と不適合性

続いて、動詞 *arriver* と前置詞 *de* の関係性について説明する。尾形 (2000) は、起点を表す前置詞 *de* が共起することができる動詞 *arriver* の構文を *Locatif* 構文と称し、起点を表す前置詞 *de* が共起することができない動詞 *arriver* の構文を *Non-locatif* 構文と称する。*Locatif* 構文には、移動や比喩的移動を表す構文が含まれる。一方で、*Non-locatif* 構文には、生起や出現を表す構文が含まれる。一般的に、動詞 *arriver* では、意味構造の都合上、起点よりもむしろ着点に重点が置かれる。これは、尾形 (2000) が主張する生起用法・散発用法における起点前置詞 *de* の共起不可能性の他にも、「*Un accident m'est arrivé.*」や「*Il peut arriver à tout le monde de se tromper.*」といった例文が示すように、生起用法・散発用法における与格補語の共起可能性で以って確認することができる。前節にて示したように動詞 *arriver* が可能用法・生起用法・散発用法を獲得したことで、多機能化したのであれば、元来の移動を表す場合の *arriver* で共起することができた前置詞 *de* は、移動の意味が希薄化した可能・生起・散発を表す場合の *arriver* では共起しにくくなるということが垣間見える。ここで注意すべきことがある。それは、「表意」と「非表意」の関係性である。「表意」とは、「字義通りの意味」、つまり、元来の意味のことであり、「非表意」とは、その「字義通りの意味」から派生した意味のことである。小柳 (2018: 74-78) によれば、表意と非表意は連続的であり、新しい文法的意味は、既存の意味とは無関係ではなく、かつ同一でもないという。したがって、生起用法・散発用法が出現した瞬間に前置詞 *de* の共起が不可能になったと考えるよりもむしろ、その共起が漸次的に制限されてきた結果、尾形 (2000) が主張する今日の状況に至ると考えるほうが妥当である。

## 3. 仮説

ここでは、2章で記したことを基に仮説を立てる。

各用法・構文の出現時期に関して、2.1.にて記したことを考慮すると、「移動用法 ([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>))] → 生起用法 ([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>))]・散発用法 ([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>))] → 散発用法① ([II V que N<sub>1</sub> V]) → 可能用法 ([N<sub>1</sub> V à inf.])・散発用法② ([II V à N<sub>1</sub> de inf.])」という順番で各用法が出現したということが予想される。

前置詞 *de* の共起に関しては、動詞 *arriver* の意味変化が漸次的であるならば、前置詞 *de* の共起制約も漸次的である。生起用法・散発用法・可能用法の *arriver* では、起点一般を表す前置詞 *de* (中性代名詞 *en*) が排除される一方で、着点を表す前置詞句 (*à N*) や与格補語がより選択されやすくなる。

## 4. 分析方法

分析のために、FRANTEXT(フランス文学作品データベース)を一次文献として用いる。分析の手順に関しては、はじめに記した通り、動詞 *arriver* における各用法・構文の出現時期(意味変化の時期)を具体的に特定した上で、各時期の各構文(主に、散発用法・可能用法)における前置詞 *de* (中性代名詞

en) の共起率を測定する。<sup>7)</sup>

分析対象の時代に関しては、古フランス語期の 9 世紀から観察することが理想的だが、FRANTEXT では動詞 *arriver* を含む文は 11 世紀までは 1 件も存在しないため、本研究では 12 世紀以降のものを扱う。

分析する量に関しては、各世紀原則 5000 の動詞 *arriver* を含む文を FRANTEXT よりダウンロードした後、ランダム係数を用いて分散させ、上位 500 の動詞 *arriver* を分析の対象とする。ただし、1 世紀当たりが保有する動詞 *arriver* の数が 500 に満たない場合はその限りではない。

分析対象の構文に関して、主語に名詞句をとる散発用法 ([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>)]) は、生起用法 ([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>)]) に一元化し、移動用法 ([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>)])・生起用法 ([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>)])・散発用法① ([II V que N<sub>1</sub> V])・可能用法 ([N<sub>1</sub> V à inf.])・散発用法② ([II V à N<sub>1</sub> de inf.]) の計五つの構文の出現時期を観察する。上記の一元化は用法分類の視座では問題があるが、本稿の目的は、動詞 *arriver* における表意 (移動用法) と非表意 (移動用法から派生した用法) の連続性とそれに伴う前置詞 *de* (中性代名詞 *en*) の共起率低下の確認であるため、本研究には直接的に影響しない。移動用法と生起用法の違いに関しては、主語が具体名詞であるか出来事名詞であるかで以って判断するべきであるが、出来事名詞とそれ以外の抽象名詞の区別は困難であるため、本研究では、その区別はせず、主語が具体名詞である場合は移動用法、主語が抽象名詞である場合は生起用法であるとする。具体名詞と抽象名詞の判断基準は以下の通りである。<sup>8)</sup>

具体名詞	五感で知覚可能なもの (輪郭があるもの、「音 ( <i>son, bruit</i> )」、「光 ( <i>lumière</i> )」など) 与格補語
抽象名詞	① 出来事名詞 「不運なこと ( <i>malheur</i> )」、「戦争 ( <i>guerre</i> )」、「事故 ( <i>accident</i> )」など 存在が前提されていない「時」(「瞬間 ( <i>moment</i> )」、「時間 ( <i>heure</i> )」など)
	② 出来事名詞以外の抽象名詞 「権力 ( <i>pouvoir</i> )」、「結果 ( <i>résultat</i> )」、「結論 ( <i>conclusion</i> )」、「希望 ( <i>espoir</i> )」など 存在が前提されている「時」(季節, 日付, 「夜明け ( <i>aube</i> )」など)

## 5. 検証

12 世紀から 21 世紀までに現れる移動用法 ([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>)])・生起用法 ([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>)])・散発用法① ([II V que N<sub>1</sub> V])・可能用法 ([N<sub>1</sub> V à inf.])・散発用法② ([II V à N<sub>1</sub> de inf.]) の計五つの構文の量と割合を表したものが次に記した表 1. である。なお、( ) 内の数値は、分析のために用いた各世紀における動詞 *arriver* の総数を基準とした時の割合であり、百分率の小数点第 3 位を四捨五入した。

これを基に、各構文・用法の出現時期を特定する。構文によっては数値が徐々に上昇しているものが

あるため、正確な出現時期を教示することはできないが、執筆者の恣意的な判断により、囲み線を施した数値の枠を各構文・用法の出現時期とする。

したがって、「移動用法 ([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>)] / 9-12 世紀) → 生起用法 ([N<sub>1</sub> V (à N<sub>2</sub>)] / 16-17 世紀頃) → 散発用法① ([II V que N<sub>1</sub> V] / 17 世紀頃) → 散発用法② ([II V à N<sub>1</sub> de inf.] / 18 世紀頃) → 可能用法 ([N<sub>1</sub> V à inf.] / 19 世紀頃)」という順番で各用法が出現したということが読み取れ、仮説とほぼ合致する。

表 1. 各世紀における動詞 arriver の各構文の数とその割合

構文	古仏語期		中世仏語期			近代仏語期				現代
	12 世紀	13 世紀	14 世紀	15 世紀	16 世紀	17 世紀	18 世紀	19 世紀	20 世紀	21 世紀
移動	48 (97.96%)	60 (100.00%)	248 (98.80%)	500 (100.00%)	468 (93.60%)	267 (53.40%)	266 (53.20%)	335 (67.00%)	322 (64.40%)	296 (59.20%)
生起	1 (2.04%)	0 (0.00%)	2 (0.80%)	0 (0.00%)	31 (6.20%)	177 (35.40%)	191 (38.20%)	98 (19.60%)	80 (16.00%)	83 (16.60%)
散発①	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	1 (0.20%)	50 (10.00%)	32 (6.40%)	18 (3.60%)	13 (2.60%)	8 (1.60%)
散発②	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	3 (0.60%)	11 (2.20%)	14 (2.80%)	31 (6.20%)	41 (8.20%)
可能	0 (0.00%)	0 (0.00%)	1 (0.40%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	3 (0.60%)	0 (0.00%)	35 (7.00%)	54 (10.80%)	72 (14.40%)
合計	49	60	251	500	500	500	500	500	500	500

続いて、散発用法① ([II V que N<sub>1</sub> V])・可能用法 ([N<sub>1</sub> V à inf.] )・散発用法② ([II V à N<sub>1</sub> de inf.] )における前置詞 de (中性代名詞 en) の共起数と共起率を表したものが次に記した表 2.である。( ) 内の数値は、それぞれ、分析のために用いた各世紀における各構文の総数を基準とした時の割合であり、百分率の小数点第 3 位を四捨五入した。尚、表 1.において構文の数が 0 である場合、百分率は表示しない。なお、参考までに、囲み線を施した数値の枠は、表 1.にて特定した各構文・用法の出現時期を示す。

散発用法② ([II V à N<sub>1</sub> de inf.] )では、前置詞 de の共起数は 0 であり、散発用法① ([II V que N<sub>1</sub> V])では、前置詞 de が共起し、可能用法 ([N<sub>1</sub> V à inf.] )では、中性代名詞 en が共起する。散発用法① ([II V que N<sub>1</sub> V])では、その構文の出現時期である 17 世紀から 21 世紀にかけて、前置詞 de の共起率が低下している。また、可能用法 ([N<sub>1</sub> V à inf.] )では、その構文の出現時期である 19 世紀から 21 世紀にかけて、中性代名詞 en の共起率が低下しており、散発用法①の場合と同様の現象が観察される。

表 2. 各世紀の動詞 *arriver* における前置詞 *de* (中性代名詞 *en*) の共起数と共起率

構文	古仏語期		中世仏語期			近代仏語期				現代
	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀	21世紀
散発①	0 (-%)	0 (-%)	0 (-%)	0 (-%)	0 (0.00%)	4 (8.00%)	3 (9.38%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)
散発②	0 (-%)	0 (-%)	0 (-%)	0 (-%)	0 (-%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)
可能	0 (-%)	0 (-%)	0 (0.00%)	0 (-%)	0 (-%)	0 (0.00%)	0 (-%)	11 (31.43%)	3 (5.56%)	3 (4.17%)

## 6. 理論的考察

以下の文章は動詞 *arriver* と前置詞 *de* (中性代名詞 *en*) の共起事例である。

- (1) *Alboufaki, qui aimait beaucoup la solitude, reniflait quand il apercevait la moindre habitation, et Carathis, le gâtant à sa manière, se détournait tout de suite. Il arriva de là que les paysans ne purent pas prendre la moindre nourriture sur la route.*

独りを好む *Alboufaki* は、少しでも人家の気配を察知すれば、ブヒヒンと鳴いた。そして、このラクダを彼女なりのやり方で甘やかしていた *Carathis* は、すぐに方向を変えた。だから、農民たちは道すがら食べ物を少しも手に入れることができなくなった。

(FRANTEXT 18 世紀 : William Beckford, *Vathek*)

- (2) *Je m'enfonçai dans un fauteuil et pris un roman. Je ne lisais pas. J'étais effrayé de mon injustice. J'en arrivais à haïr la comtesse !*

椅子に座り込み、小説を手にとったが、読めなかった。私自身の不正義に身震いし、ひいては、伯爵夫人を憎む感情すら起こった。

(FRANTEXT 19 世紀 : Arthur comte de Gobineau, *Les pléiades*)

以上に掲げた前置詞 *de*、及び、中性代名詞 *en* は、和訳の通り、順接の機能を保有する。(1) における « *Il arriva de là...* » は、孤独を好む *Alboufaki* を理由に、*Carathis* が、旅行者に食べ物を分けてくれるはずである集落を意図的に避けた結果 (「農民たちが食べ物を手に入れることができなくなった」ということ) を表す。(2) における « *J'en arrivais à...* » は、前文が示す事柄の範囲を広げた内容 (「自らの不正義を恐れた結果、それと同時に、その不正義を犯す原因をつくった伯爵夫人を憎む感情が発生

した」ということ)を表す。「de là」という前置詞句は、物理的起点だけでなく抽象的起点をも表すことが可能であり、代表例として「*On peut conclure de là que ...*」(「そこから...と結論できる」といった表現においても用いられる。2.1.にて、[N<sub>i</sub> V à inf.] と [II V que N<sub>i</sub> V] は、法動詞 *pouvoir* を用いた表現に換言できるということから、動詞 *arriver* の原義が抽象化したものであると主張した。そのため、上記の例に出ている前置詞 *de*、及び、中性代名詞 *en* は、物理的起点という原義が抽象化した意味・機能(順接)を保有すると判断してよい。

ここで、上記の例における [II V que N<sub>i</sub> V] の意味を分析する。[II V que N<sub>i</sub> V] は、現代フランス語では散発を意味するが、動詞 *arriver* におけるこの統語構造の出現時期では、必ずしも散発のみを表すとは限らず、この統語構造の出現時期以前に存在した移動・生起の意味を少なからず保有すると考えられる。つまり、(1)に示した和訳のように、この時期における [II V que N<sub>i</sub> V] は、散発よりもむしろ、事行の生起を単純に意味したと言える。換言すれば、この統語構造をとる動詞 *arriver* は、事行の成立を強調するものであったということである。意味の漂白化について、秋元(2005:34)は、ある語の意味が漂白化したとしても、その語の原義が消失することはなく、ある程度はそれを保持すると説明する。本論の場合、[II V que N<sub>i</sub> V] は、その出現時期において、自身の動詞 *arriver* の原義(移動)を多量に含んだと考えられる。それ故に、出現したばかりの [II V que N<sub>i</sub> V] では、前置詞 *de* の共起が現代フランス語の場合よりも広く容認されたと考えられる。

[N<sub>i</sub> V à inf.] に関しても、それと同様の主張が可能である。この統語構造に関しては、不定詞が表す事行が動詞 *arriver* の着点である。出現したばかりのこの統語構造では、移動の意味が多く存在したため、何かしらの起点を表す中性代名詞 *en* が容易に共起することができたと考えられる。ただし、現代フランス語においても、「*en arriver à inf.*」というイディオムがあり、これは「ついに...する」という意味で用いられる。表2によると、[N<sub>i</sub> V à inf.] における中性代名詞 *en* の共起率は、[II V que N<sub>i</sub> V] における前置詞 *de* の共起率よりも高い。このことから、少なくとも動詞 *arriver* に関して、ある語とある語の組み合わせが、その出現時期において多用されればされるほど、イディオムとして残存しやすいということが考えられる。

この一連の現象は、小柳(2018)による「言語変化の段階」と「意味の重層化」に関する説明を援用すれば、より分かりやすく理解することができる。

- ・ 言語変化の段階 (小柳 2018: 25)
  - a. 案出： 新しい言語表現の産出。ある個人がある時に1回行う。
  - b. 試行： 新しい言語表現の拡散。複数の人が散発的に行う。
  - c. 採用： 新しい言語表現の受容。ある集団内で人々が漸次的に行う。
- ・ 多義化が起こるメカニズム (小柳 2018: 204-205)

一般に語は使用に当たって常に差異を含み、それが小異であれば単義の範囲に収まるが、差異

が大きくなると、別義と捉えられるようになる。それまでの意味 (使用法) に加えて、新たな意味 (使用法) での使用が可能になると、意味は重層化し、多義化が起こる。

これらの説明を用いれば、[II V que N<sub>1</sub> V] に関しては、データが小さいため断定することはできないものの、その出現時期である 17 世紀が案出・試行の時期であると予想され、その後、その統語構造が採用されるにつれて前置詞 **de** の共起が容認されなくなったと考えられる。そして、17 世紀に出現したばかりの [II V que N<sub>1</sub> V] は、それ以前の移動・生起の意味と現代フランス語における散発の意味の両方を保有したと考えられ、専ら散発の意味での使用が可能になると、移動・生起の意味と散発の意味が弁別され、動詞 **arriver** において多義が生じたということが窺われる。[N<sub>1</sub> V à inf.] に関しては、その出現時期である 19 世紀が案出・試行の時期であり、その後、その統語構造が採用されるにつれて中性代名詞 **en** の共起が容認されにくくなったと考えられる。たとえ容認されたとしても、それは « **en arriver à inf.** » (「ついに...する」) というイディオムとして容認されただけであり、出現したばかりのその共起関係における意味とは異なる。つまり、19 世紀の « **en arriver à inf.** » が「それによって (= 前文脈の内容) ...するに至る」という意味であり、これが多用されることで、現代フランス語では「ついに...する」という意味を獲得したということが言えるだろう。

以上の考察は、以下の表で表される。なお、これらの表が表すところは、移動用法から派生した各用法が始原の用法 (移動用法) に付加されたということに基づく。前置詞 **de** (中性代名詞 **en**) の共起可否 (選択制限) に関する判断は、動詞 **arriver** における始原の用法 (移動用法) と比較して行われる。

・ 動詞 **arriver** における [II V que N<sub>1</sub> V] の出現と進化 (出現時期 : 17 世紀)

	12~16 世紀	17 世紀	18 世紀	19 世紀	20 世紀	21 世紀
用法	移動	移動+散発	移動+散発	散発	散発	散発
起点前置詞 <b>de</b> に対する選択制限	弱	中	中	強	強	強
言語変化の段階	始原	案出+試行		採用		

・ 動詞 **arriver** における [N<sub>1</sub> V à inf.] の出現と進化 (出現時期 : 19 世紀)

	12~16 世紀	17 世紀	18 世紀	19 世紀	20 世紀	21 世紀
用法	移動	移動	移動	移動+可能	可能	可能
中性代名詞 <b>en</b> に対する選択制限	弱	弱	弱	中	強	強
言語変化の段階	始原			案出+試行	採用	



## おわりに

本稿では、フランス語の動詞 *arriver* における各用法・構文の出現時期（意味変化の時期）を具体的に特定し、かつ、各時期の各構文における前置詞 *de*（中性代名詞 *en*）の共起率を測定することで、言語進化の一側面を概観した。元来より移動を表す動詞 *arriver* が散発用法・可能用法を獲得するにつれて、前置詞 *de*（中性代名詞 *en*）の共起に制約が徐々に課され、最終的には、それらは共起しづらくなる。この「前置詞 *de*（中性代名詞 *en*）の共起に制約が徐々に課される」段階が新用法の案出段階と試行段階であると考えられる。現代フランス語に限定すれば、「生起用法・散発用法における動詞 *arriver*」と「起点を表す前置詞 *de*」の共起が不可能であるという尾形（2000）の主張には一定の妥当性がある。しかし、通時的に観れば、その共起不可能性は、生起用法・散発用法の構文の出現時期に突如として生じたものではなく、比喩の程度が問題となり、元来の用法（移動用法）と新用法（生起用法・散発用法・可能用法）が混合して漸次的に生じたものである。つまり、移動動詞 *arriver* の意味変化が漸次的であるならば、前置詞 *de* の共起も漸次的に制約されていく。本研究では、生起用法と散発用法を一元化したという用法分類上の問題（cf. 第4章）があり、前置詞 *de* の共起に対する生起の意味と散発の意味の影響を考慮することが今後の課題として挙げられる。また、各構文の出現時期と前置詞 *de*（中性代名詞 *en*）の共起率を確認する際のデータが小さいということも問題点として挙げられる。しかし、「起点補語の付加が任意的であるということ」と「起点を表す要素が着点を表す要素と比べて相いれにくいということ」、「新用法が定着するにつれて根源的な意味（移動）が極限まで希薄化するということ」を考慮すれば、新用法の出現時期に起点を表す要素が共起する事例は有意なものであると思われる。

## 注

<sup>1)</sup> 「散発用法」（*emploi sporadique*）という用語は、Kleiber(1983) が用いたものである。この用語は、対象である生起事象  $\alpha$  が、ある生起事象  $\beta$  の十分条件であり、かつ、複数存在する時に用いられる。例えば、「誰もが間違えることがある」という生起事象 ( $\alpha$ ) は「誰もが間違える」という生起事象 ( $\beta$ ) の十分条件である。

<sup>2)</sup> 1章に記した例文とその和訳は『ロワイヤル仏和中辞典 第2版』より引用した。

<sup>3)</sup> *arrive* 系動詞や *come* 系動詞で以って生起を表す言語はフランス語だけではない。例えば、日本語では、「出で来」というカ行変格活用の複合動詞、又は、「起こる」という動詞で以って生起を表した。いずれも主語名詞句の指示対象に対する何らかの接近を表す動詞である。2.2.にて述べるように、動詞 *arriver* では、前置詞 *de* が表す起点よりもむしろ着点に重点が置かれる。*arriver* という着点に焦点が当たる動詞が汎用されなかった時代では、生起を表す際には *venir* という動詞を使わざるを得なかったということが考えられる。日本語の生起表現もそれと酷似しており、時代が経つにつれて「出で来」という動詞は、「できる」という可能用法において痕跡を残し、生起を表す際には用いられなくなった。

少なくとも、フランス語と日本語における生起表現の発達には一定の類型が観察される。

4) 秋元 (2005:34) によれば、意味の漂白化 (Semantic bleaching) は、「意味の弱化・消失」のことであり、同様に「意味の縮小・一般化」のこともである。また、Heine and Kuteva (2002:45-46) は、arrive 系動詞の用法を ability, allative, succeed, until (temporal) の大きく四つに分類する。

5) [N<sub>i</sub> V à inf.] という統語構造をとるものを便宜上「可能用法」と本稿では称するが、この構文が必ずしも可能を表すとは限らない。

6) 注 1) にて言及したように、散発は、事行が複数存在する時に現在時制で表現される。しかし、[III V à N<sub>i</sub> de inf.] ・ [II V que N<sub>i</sub> V] に関しては過去時制にすることができる。このことについて、林 (1998:51-52) は、動詞 arriver を複合時制にした場合は、事柄が過去に一度発生したことを示すと説明する。本論では、便宜上、[II V à N<sub>i</sub> de inf.] ・ [II V que N<sub>i</sub> V] の構文を時制に関係なく「散発用法」と称する。

7) 同章にて示すように、移動用法と生起用法を区別する方法として、具体的主語名詞と抽象的主語名詞を挙げているが、それらを截然と見分けることは困難であるため、本研究では、生起用法における前置詞 de の共起率は計測しない。

8) この名詞分類の一部については、尾形 (2000) による分類を参考した。

#### 参考文献

- 秋元実治 他 (2005) 『文法化——新たな展開』, 英潮社.
- 尾形こづえ (2000) 「位格補語と与格補語——フランス語動詞 arriver の場合」, 『青山学院大学総合研究所 人文学系研究センター研究叢書』第 14 号, 65-106 頁.
- 小柳智一 (2018) 『文法変化の研究』, くろしお出版.
- 林迪義 (1998) 「POUVOIR のモダリティについて」, 『フランス語を考える——フランス語学の諸問題 II』, 三修社, 45-57 頁.
- 山梨正明 (2009) 『認知構文論——文法のゲシュタルト性』, 大修館書店.
- Heine, Bernd and Kuteva, Tania (2002) *World Lexicon of Grammatical Change*, Cambridge University Press.
- Kleiber, Georges (1983) L'emploi "sporadique" du verbe pouvoir en français, *La Notion sémantico-logique de modalité*, pp.183-203.
- Iyeiri, Yoko (2010) *Verbs of Implicit Negation and Their Complements in the History of English*, John Benjamins, Yushudo Press.

#### 辞書

- 田村毅 他 (2005) 『ロワイヤル仏和中辞典 第 2 版』, 旺文社.
- Greimas, Algirdas Julien (2012) *Dictionnaire de l'Ancien Français*, Larousse.